

若い世代の方々へ—— 戦争は、するな

東京・新宿にある「平和記念展示会資料館」では、戦争を知らない若い世代が、戦争体験者と触れ合う「語り部お話し会」が開催されている。現在、語り部を務めるのは12名。6月下旬に行なわれた会では、14歳で「満蒙開拓青年義勇団」の一員として満州に渡った丸澤さんの体験談が語られた。丸澤少年を待ち受けていたのは、日々晒される命の危険とひもじさだった。

「平和記念展示会資料館」語り部

丸澤一也

さん(86歳)

丸澤さんは昭和5年(1930)2月、東京の下町、神田で生まれた。「私は長男なんですけど、ほどなくして父親が新宿に移り床屋を開業しました。当時、あたりには花柳界があって、父の店にも芸者のお得意さんが大勢いて賑わっていたんです」

地元の尋常小学校を卒業後、高等小学校に入学した丸澤さんは、「3年生の時に陸海軍少年兵のテストを受けようと思ったんですが、体が小さかったこともあって断念したんです。ところが、在学中に義勇軍の募集を目にして……。ただ、長男でしたから母親は大反対でね。それを振り切って応募したんです」

満蒙開拓青少年義勇軍とは関東軍により内地の青少年を満州国に開拓民として送出する日本人農業移民事業制度のことだ。結局、高等小学校を3年で中退した丸澤さんは昭和19年3月、「第七次満蒙開拓青少年義勇軍」に参加、茨城県の内原訓練所に

入所し、満州へ入植するための訓練と実習を受けることになる。丸澤さん、14歳春のことだった。

◇

内原訓練所では稲穂や野菜作り、たい肥作りといった農業訓練のほか「軍事訓練は柔剣道や木製の銃で突きの練習をしたり、匍匐前進したり。朝ラッパの音で目をさますと、点呼、駆け足、体操。朝食はサツマイモ入り麦飯と味のない味噌汁。あとは黒いたくわんが2切れだけでした」

入浴は2日に1回。そして夜床に入れば東京で暮らす両親の顔が眼下に浮かび自然と涙が頬を伝う、そんな日々が続いた。

昭和20年3月、いよいよ内原訓練所を後にした義勇団は列車で上野駅へ。両親と最後の別れをした後、上野から列車で新潟に入り、新潟港から船で満州の勃利を目指すことになった。

「今まで近くにあった山々が、あっという間に小さくなっていく……。自然に涙があふれていましたね」

日本海の荒波に揺られながら到着したのが、ロシアとの国境近くに位置する朝鮮の羅先港(ラソン)だった。「そこからは窓がない貨車に押し込



平和祈念展示資料館内の展示パネル前にて。当館は、さきの大戦における、兵士、戦後強制抑留者および海外からの引揚者の労苦を物語る様々な実物資料、グラフィック、映像、ジオラマなどを戦争体験のない世代にもわかりやすく展示している。

平和祈念展示資料館
所在地/〒163-0248
東京都新宿区西新宿2-6-1 新宿住友ビル48階
TEL:03-5323-8709 / FAX:03-5323-8714
E-mail/info@heiwakinen.jp
開館時間/9:30~17:30(入館は17:00まで)
入館料/無料
休館日/年末年始(12月28日から1月4日まで)、
新宿住友ビル全館休館日(2月第1日曜日、8月第4日曜日)、そのほか展示替えなどの日(不定期)

められて、翌朝勃利駅に到着。ところが駅から訓練所までの移動はトラックと聞いていたのに燃料がなくなっていたらしく、結局60キロを徒歩で行くことになってね。あれは辛かったなあ」

2か月後の5月末、満州の南にある遼陽(リョウヨウ)に50名が派遣され、丸澤さんもその一人として参加。

「ここは関東軍の火薬製造工場で50人は部隊の後方支援要員として任務に就くことになった。ところが、7月中旬になると警備の兵隊が手薄になり、我々が警備も兼任することになった。でも、武器は槍一槍と手榴弾が2個だけ。これで守れというんですからね、無茶な話です」

そして8月中旬、突然告げられたのが終戦という驚愕の事実だった。

その後、遼陽では内戦が始まり、団体生活を送っていた義勇軍も巻き込まれることを恐れ、隊員は分散。

「日本人だとわかると殺されてしまいますからね。そこで、私も1歳くらいの子供のいる家で生活を送るようになり、食料を確保するため、日々奔走することになります」

空き缶に火薬の煤を詰めた「爆炭」を作り、それを担いで遼陽の街に立つ闇市に出かけては、それを食料に

忘れたくても忘れられないしね。言葉に表わせない思いもありました」

だが、時間の経過とともに、自分の体験を、今を生きる世代に伝える必要を感じた。語り部お話し会で感想文をもらうと、やはり受け止め方はいろいろとあることがわかるし、今はそれが励みになります」

丸澤さんは、今日も誠心誠意の「真心」を込め「平和の尊さ」を語っている。

替え再び6キロの道を戻る日々。厳しい生活の中で義勇軍の仲間3分の1が、満州の大地で命を落としたという。

「隣で話していた友達が朝起きると死んでいる。もう涙なんて枯れ果てていましたね」

そんな丸澤さんのもとに日本への引揚げの知らせが入ったのは翌昭和21年7月のことだ。丸澤さんはすでに16歳になっていた。胡芦島(コロコ)から海軍の駆逐艦に乗り継ぎ博多港へ。博多からは列車を乗り継ぎ新宿についた。

新宿駅には屋根がなく富士山がくつきり見えたという。

「満州に行ったのは親孝行をしたと思う一心から。でも、帰ってきたときには俺はいったい何のために行ったんだろうという虚しさしかなかった。でも、これから生きていかなければならない。そう頭を切り替えるしかなかったんです」

生き残った者の使命を果たす

満州から引き揚げてきた丸澤さん

らは「東京桃山会」を設立。東京・府中の東郷寺に慰霊碑を建て戦没者の霊を慰めた。

「日本に戻ったあと、満州で亡くなった戦友たちのことを遺族に話すときは本当に辛かった。もちろん、自分の子供がどういいう死に方をしたかを知りたいという遺族の気持ちは痛いほどわかる。でも、聞かれるほうは本当に辛くてたまらないんです。隣で話していた友達が朝起きると死んでいる……。何度も何度もそんな話をしなければいけない。辛い経験は



まるさわいちや●旧満州開拓青年義勇隊、第七次東京堀江中隊。1930年東京都生まれ。1944年3月満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所(茨城県)に入る。1945年3月内原訓練所を出発し、満州(現・中国東北部)の勃利訓練所に入る。5月遼陽に移り、383部隊の後方要員として農作業や警備などを行なう。終戦後、遼陽の義勇隊は自然解散となり、食料を確保するため、満州人農家の手伝いや闇市での商売をしながら、避難生活を続ける。1946年7月胡芦島から福岡県の博多港に引揚げ。